

琵琶湖のオオクチバス仔群に対する潜在的捕食者

藤田 建太郎（滋賀県立大学大学院）

要旨

北アメリカ原産のオオクチバス *Micropterus salmoides* が琵琶湖において初めて確認されたのは1974年のことである。その後、各地の水域で1980年代以降急激に増加し、その食害による在来魚への影響が懸念されている。

本種は雄が産卵床と呼ばれる巣を造成し、産卵された卵および仔魚・稚魚を保護することが知られている。2001年から琵琶湖北湖で行っている繁殖生態の調査から、仔魚が浮上を行うまでに雄親魚による保護が放棄された場合、仔群が死滅することが明らかになった。これらの死滅の主要な要因であると考えられる、卵・仔魚に対する捕食者について得られた知見を発表する。